

日本学術振興会研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）
中間評価（平成29（2017）年度採択課題）書面評価結果

日本側拠点機関名 東京大学（教授・浦野 泰照）
研究交流課題名 国際フォトセラノスティクス共同研究教育拠点

評価結果（総合的評価）	
<input type="radio"/>	A 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。
<input checked="" type="radio"/>	B 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。
<input type="radio"/>	C ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。
<input type="radio"/>	D 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。
所見	
<p>世界的水準の研究交流拠点の構築状況は、相手国拠点との共同研究、セミナーの開催、それを介した研究者交流を積極的に推進し、先端医療技術開発分野フォトセラノスティクスの実現を目指し、東京大学をハブとした国際ネットワークの基盤を構築しており評価できる。国際的に評価が高い学術雑誌への論文掲載や国際共著論文などの研究成果も順調である。参加した研究者や若手研究者の国内外での受賞が複数あった。</p> <p>若手研究者育成への貢献面では、相互交流に重点を置いて、若手研究者シンポジウムの継続開催、拠点を介した関連・異分野間交流の実施、さらに国際共著論文の発表などの実績は長期的な展開に繋がるものであり、今後の国際展開のための基盤構築として十分な成果をあげている。また、若手シンポジウムの参加者間で新しい分野融合の共同研究の開始、若手研究者の主体的な海外での研究への挑戦など、波及効果も認められる。課題終了後も海外に打って出るマインドをもつ若手をできるだけ多く養成するために、本課題により積極的に行われている若手の2か月海外滞在は意義深い。国内研究室への派遣も有益な試みである。</p> <p>今後の研究交流活動計画について、現在は基盤が構築された段階であり、共同研究の実績もまだ少なく、今後はネットワークの強化・発展、成果の実装化などの推進により、フォトセラノスティクス分野の世界を先導する自律発展型研究交流拠点の構築が期待される。加えて、国内での認知、波及効果への努力が真の国際拠点構築のために望まれる。また、より多くの研究者が本課題に基づく国際共同研究の成果を論文の形で発表することが望まれる。</p>	